

## 婚姻習俗と文学——「恋」の諸相の底流にあるもの——

胡 潔

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

### 一 はじめに

古代日本文学をアジアないし世界文学の中において眺めた時、恋の文学が発達したことは鮮明に見てとれる。このような恋の文学の発達の要因については、これまで多くの研究で言及されてきたが<sup>1</sup>、本論文では、婚姻形態と恋愛表現の相関関係を念頭に置きながら、比較の視点から古代日本と古代中国の文学における恋愛表現の相違および両者間の接触について考えてみたい。

周知の通り、古代日本では「妻問婚」が行われていた。これは男女が別々に生活し、男性が女性を訪れるという婚姻形態である。このような別居婚は平安前期、中期を通して徐々に変わり、同居婚が一般的になってくるが、夫の生家での同居、つまり夫方居住は皆無であった<sup>2</sup>。一方古代中国では、典型的な夫方居住婚（娶嫁婚）が行われ、女性が結婚によって夫の生家に入る婚姻形態であった。古代中国と古代日本の婚姻形態には著しい対照性があり、婚姻の締結から結婚後の居住まで多くの相違点が見られるが<sup>3</sup>、ここで特に指摘しておきたいのは、婚姻締結の方法と結婚後の居住における相違である。まず、婚姻締結の方法であるが、古代日本の求婚は歌を贈ることから始まる。平安時代になると、女性の親、特に父親の権限が増してくるが、少なくとも形の上では、男性が女性に歌を以って求婚し、それに対して女性自身が直接

意思表示をすることになっていた。一方中国では、結婚は両家の家父長の間で決定され、男女本人同士の承認は要しない。従って、女性に対する直接的な求婚の空間と時間は用意されていない。結婚後の居住形態を見ても、古代日本では、夫婦別居の通い婚は無論のこと、平安期の夫婦同居の場合を見ても、結婚当初からのある時期は大抵別居形態であった。従って、「歌」は空間的に離れた夫婦或いは恋人間の交流の重要手段になる。それに対し、古代中国の夫方居住婚下の夫婦はこのような空間の隔たりによる交信は必要としない。要するに、求婚、結婚ないし結婚後の長期間に亘り、歌による男女間の愛情交流のあった古代日本と、媒酌人の仲介や家父長の決定のもとで、一連の儀式を経て男女が結婚し、結婚後に同じ屋根の下で暮らしていた古代中国とは、恋愛表現の「空間」と「時間」もおおのずから異なっているのである。

### 二 自殺する女性達——処女塚伝説歌を中心に——

処女塚伝説は古くから日本人に愛されてきた伝説の一つである。『万葉集』にはいくつかの類話が見られ、ヒロインの名前は定まっていらない。ここでは『万葉集』巻九にある高橋虫麻呂の三つの作品から見てみることにする。

① (珠名娘子) たまなおとめ しながら鳥 安房に継ぎたる 梓弓 末の珠名は 胸別の ゆ

たけき吾妹 腰細の すがる娘子の その姿の 端正しきに A花の  
如 咲みて立てれば 玉梓の 道行く人は 己が行く 道は行かずに  
召ばなくに 門に至りぬ さし並ぶ 隣の君は あらかじめ 己妻離  
れて 乞はなくに 鑑さへ奉る 人皆の 斯く迷へれば 容艶きに  
よりてそ妹は たはれてありける (一七三八番歌)

## 反歌

金門にし人の来立てば夜中にもB身はたな知らず 出でてそ逢ひける

② (真間娘子) 雞が鳴く 吾妻の国に 古に ありける事と 今までに 絶  
えず言ひける 勝鹿の 真間の手児奈が 麻衣に 青衿着け 直さ麻  
を 裳には織り着て 髪だにも 搔きは梳らず 履をだに はかず行  
けども 錦綾の 中に包める 齋児も 妹に如かめや 望月の 満れ  
る面わに A花の如 咲みて立てれば 夏虫の 火に入るが如 湊入  
りに 船漕ぐ如く 行きかぐれ 人の言ふ時 いくばくも 生けらぬ  
ものを 何すとか B身をたな知りて 波の音の 騒く湊の 奥つ城  
に 妹が臥せる 遠き代に ありける事を 昨日しも 見けむが如も  
思ほゆるかも (一八〇七番歌)

③ (菟原処女) 葦屋の 菟原処女の 八年児の 片生の時ゆ 小放りに 髪  
たくまでに 並び居る 家にも見えず 虚木綿の 隠りて居れば 見  
てしかと 悒憤む時の 垣ほなす 人の誂ふ時 千沼壮士 菟原壮士  
の 廬屋焼き すすし競ひ 相よばひ しける時には 焼き大刀の  
手かみ押しねり 白真弓 鞆取り負ひて 水に入り 火にも入らむと  
立ち向かひ 競ひし時に 我妹子が 母に語らく 倭文たまき 賤し  
きわがゆゑ 大夫の 争ふみれば 生けりとも 逢ふべくあれや し  
しくしる A黄泉に待たむと 隠り沼の 下延へ置きて うち嘆き  
妹が去ぬれば 千沼壮士 その夜夢に見 取り続き 追ひ行きければ

後れたる 菟原壮士い 天仰ぎ 叫びおらび 地を踏み をかみたけ  
びてもころ男に 負けてはあらじと 掛け佩きの 小大刀取り佩き  
ところづら 尋め行きければ B親族どち い行き集り 永き代に  
標にせむと 遠き代に 語り継がむと 処女墓 中に造り置き 壮士  
墓 このもかのもとに 造り置ける 故縁聞きて 知らねども 新喪の  
ごとも 音泣きつるかも (一八〇九番歌)

虫麻呂のこの三つの処女塚伝説歌は明らかに一つの流れをなしており、①の珠名娘子の話は厳密に言えば処女塚の話ではないが、豊かな異性関係を持つ自由奔放な女性、②の真間娘子はそれより内省的になり、わが身を知る女性、さらに③の菟原娘子になると自らの行動で意思表示をする女性として詠まれていく。珠名娘子と真間娘子は同じ「花の如」(傍線A)の美貌でありながら、対照的に詠まれていることはすでに関口裕子氏によって指摘されている<sup>4</sup>。確かに珠名娘子を「身はたな知らず」(①傍線B)、真間娘子を「身をたな知りて」(②傍線B)と評価するところに虫麻呂の女性観が投影されている。③の菟原娘子になると、求婚者は千沼壮士と菟原壮士の二人に特定され、女性の自殺、二人の求婚者の跡追い自殺、さらに三人の合葬と、よりまとまった、よりドラマチックな展開となる。小島憲之氏は③の一八〇九番歌の終わりの部分(③傍線B)にあった三人の男女の合葬に関する描写は、中国六朝時代に成立した『玉台新詠』の「焦仲卿妻の為の作」(以下「焦仲卿妻」と略称する)に似ていると指摘している<sup>5</sup>。「焦仲卿妻」は実際あった夫婦心中事件が後に文人達によって潤色された作品である。両作品の相違を把握するために、ここでは「焦仲卿妻」の重要部分のみ挙げておく<sup>6</sup>。

① (序文) 漢末建安中に、廬江府の小吏、焦仲卿が妻の劉氏、仲卿が母の遣

る所と為り、自ら誓つて嫁せず。其の家之に逼るや、乃ち水に没して死す。仲卿之を聞き、亦自ら庭樹に縊る。時人之を傷み、詩を為ると爾云ふ。

② (夫家での苦勞) 鷄鳴機に入りて織り、夜夜息ふことを得ず。三日に五匹を断てども、大人は故に遅きを嫌ふ。織ること遅きを作すが為に非ず、君が家の婦とは為り難し。

③ (離別と再会の誓い) 府吏の馬は前に在り、新婦の車は後に在り。……且つ暫く家に還り去れ。吾今且に府に赴かんとす。久しからずして当に帰還すべし。天に誓つて相負かずと。新婦府吏に謂ふ。君が区々の懐に感ず。君既に若し録せられなば。久しからずして君の来るを望まん。

④ (夫婦心中の約束) A 黄泉の下相見えん。今日の言に違ふこと勿れと。手を執つて道を分つて去り、各各家門に還る。

⑤ (二人の自殺) 奄奄たる黄昏の後、寂寂として人定まるの初め、我が命は今日に絶え、魂去りて戸のみ長く留まらん。裙を攬りて絲履を脱し、身を挙げて清池に赴く。府吏此の事を聞き、心に長別離を知り、徘徊して樹下を顧み、自ら東南の枝に掛る。

⑥ (二人の死後) B 両家合葬を求め、華山の傍に合葬す。東西に松柏を植ゑ、左右に梧桐を種う。枝枝相履蓋し、葉葉相交通す。中に雙飛鳥有り、自ら名いふて鴛鴦と為す。頭を仰いで相向つて鳴き、夜夜達五更に達す。

両作品を比較すると明らかになるように、後半部分には幾つかの相似点がある。先述した男女合葬の部分(傍線B)以外に、焦仲卿妻劉氏の言葉「黄泉の下相見えん」(傍線A)も菟原娘子の「黄泉に待たむ」の言葉と酷似していることから、虫麻呂が菟原娘子の歌を詠んだ際に「焦仲卿妻」を意識していたことは間違いない。ただ、筆者の関心は、内容の相似や相違の問題に

なく、婚姻形態という土壌と恋愛表現の体系の関係にある。ある社会の恋愛表現の形成を考える時におよそ二つの視点が不可欠である。一つは、生活形態・婚姻形態という根源的要因およびそれによって形成された恋愛表現伝統の問題と、もうひとつは外来文学による影響である。後者は前者によって取捨選択され、再解釈されるのである。「焦仲卿妻」と虫麻呂の菟原娘子伝説歌の間には明らかな影響関係があり、男女ともに死んでいくという共通点を持つているにもかかわらず、それぞれ根ざす土壌が異なっているため、そこで展開されている人間模様も異なる。「焦仲卿妻」は典型的な夫方居住婚(娶嫁婚)を背景にしたもので、劉氏の悲劇は、夫家における人間関係のもつれから引き起こされたものである。一方、菟原娘子の話は、妻間婚社会の求婚形態を背景にしており、求婚の「場」の「妻争い」によって女性が自殺に追い込まれた悲話である。両作品はそれぞれの文学の伝統の中で形成され、継承されている。菟原娘子の話は、古来伝承されてきた多くの「妻争い」の類話を継承しながら、平安期物語の求婚譚の先蹤をなすものとして位置づけられよう。一方「焦仲卿妻」も『詩経』に始まる「棄婦怨」つまり離縁された女性の歌の流れを継承しながら、再婚の誘惑への拒絶や、夫婦の愛と死といった中国文学の多くの典型的要素を持ち合わせた作品で、夫婦悲恋の濫觴を作った作品と見ることができよう。

では、このような、異なる土壌に根ざした両作品の間の影響関係から何が読み取れるのか。まず、菟原娘子の話の妻争いの「場」における男女の関係を考えてみる。妻争いに関する記述は、『古事記』清寧紀や『日本書紀』武烈紀などに見られる。これらの記述から、単に女性の気持だけではなく、求婚の勝敗で決められる、という古代的求婚のルールが窺える。『日本書紀』武烈紀には次のように記されている。

是に太子、物部鹿鹿火大連が女影媛を聘へむと思欲して、媒人を遣わして、影媛が宅に向はしめ、会はむことを期りたまふ。影媛、曾て真鳥大臣が男鮪に奸されたり。鮪 些許 鮪云々太子の期りたまふ所に違はむことを恐りて、報じて曰さく、「妾、望はくは、海柘榴市の巷に待ち奉らむ」とまをす。

王権の威信を語る『日本書紀』では、鮪と影姫の関係が「奸」と表現されており、鮪も結局王権の威信の侵犯者として殺されたが、政治的な要素を取り払って読めば、すでに恋人（或いは夫）を持った女性に、もう一人の男性が知らずに求婚してきたという悲劇に過ぎない。影媛は武烈の求婚に対し、直接言葉では断らず、「海柘榴市の巷に待ち奉らむ」と言つて歌垣で勝負させる。勝敗は最も説得力を持ったからであろう。これは男女間の歌の挑み合いにも通ずる論理である。菟原娘子もこのような求婚者達の激しい競争、それも勝ち負けがつかないほど激しい競争の前に立たされたヒロインではなかったか。注目したいのは、菟原娘子の自殺の理由である。虫麻呂が菟原娘子自身に言わせている理由は「賤しきわがゆゑ大夫の争ふみれば生けりとも逢ふべくあれや」（数ならぬこの私が原因で大の男一人が争うのを見ると、たとい生きてもだれとも結婚するわけにはいきません）ということである。わが身を卑下したところは真間娘子の「身をたな知」るのと似ている。死を以つて男達に勝ち負けをつけまいとし、その態度を貫こうとする菟原娘子こそ虫麻呂が最も称揚したかった女性ではないか。興味深いのは、虫麻呂が詠む菟原娘子の自殺理由と『万葉集』にある同類の処女塚伝説歌のそれとは微妙に異なる点である。『万葉集』十六巻の「由縁ある雑歌」には、桜児と縋児の話が見られる。ヒロイン達の自殺理由を見ると、桜児の場合は「古より今に至るまで、聞かず、見ず。一の女の身にして、二つの門に適くという」

とを」という儒教的貞操観が表出しており、縋児の場合は「一の女の身は滅易きこと露の如し。三の雄の志は平び難きこと石の如し」というように対句的になり、幾分仏教的にもなっている。本来妻争いに勝ち負けをつけることを回避しようとした女性の行動が、複数の男性との関係の回避として再解釈されていたことが明瞭に観察される。一方虫麻呂の場合は、儒教的な貞操観そのものよりも、古代日本社会の求婚の場の論理の中で、女性の持つべき慎み深さ、公平さを菟原娘子に与えようとした。さらに桜児と縋児の場合には、男性達が挽歌を詠むことに止まり、跡追い自殺はない。それに対し、虫麻呂の歌では二人の求婚者が跡追い自殺をしている。先述したように、虫麻呂は焦仲卿妻の話を意識していた。彼の詠んだ男性達の跡追い自殺や合葬は焦仲卿の後半部と非常に相似しながら、対照的に仕上げられているのである。「焦仲卿妻」の場合は、夫婦が心中を約束した後、妻劉氏は結婚当日自殺し、夫仲卿は妻の死に接して自殺する。一方、菟原娘子伝説歌では、求婚者の一人血沼壮士は夢に菟原娘子が現れたため跡追い自殺をし、もう一人の菟原壮士も「もころ男に負けてはあらじ」つまりライバルに負けてはられない、という決死の「妻争い」精神で自殺する。さらに男女合葬の場面を見ると、焦仲卿夫婦は夫婦の合葬によつて夫婦愛の話型の枠内に収まるが、菟原娘子の場合は三人塚で、最後の最後まで男性達の「競争」と女性の「公平」が表現されている。これは虫麻呂の創作かそれとも本当にあったことかは俄かに決めたいところがあるが、それぞれの婚姻形態に根ざした類型の中で展開され、それぞれの理想性、価値観が表されていることは確かである。

### 三 「怨む」女性と男性―『新撰万葉集』の漢詩と和歌を中心に―

「怨恨」という言葉は、『万葉集』に見られる。一例を挙げると、巻四六一九番歌。

## 大伴坂上郎女の怨恨の歌一首

押し照る 難波の昔の ねもころに 君が聞して 年深く 長くし言へば  
 まそ鏡 磨ぎし情を 許してし その日の極み 波のむた なびく  
 玉藻の かにかくに 心は持たず 大船の たのめる時に ちはやぶる  
 神か離けけむ うつせみの 人か禁ふらむ 通はしし 君も来まさず  
 玉梓の 使も見えず なりぬれば いたもすべ無み ぬばたまの 夜は  
 すがらに 赤らひく 日も暮るるまで 嘆けども しろしを無み 思へ  
 ども たづきを知らに たわやめと 言はくも著く たわらはの 音の  
 み泣きつつ たもとほり 君が使を まちやかねてむ

この長歌は、通つてこない男性の背信を非難しながら自分の待つ辛さを詠んだものである。かつて孫久富氏が『詩経』に見られる「棄婦怨」は、『万葉集』に出てくる女性の怨恨歌より、怒り、嘆きととつた感情が遙かに激しいと指摘したことがある。孫氏はその理由に妻問婚社会の夫婦の絆は、倫理道徳に厳しく縛られた古代中国の夫婦ほど強くなかつたことを挙げている。両国の婚姻相違に注目した、興味深い指摘である。孫氏の指摘を踏まえながら、もう少し女性の生活環境という観点から考えてみたい。そもそも「怨恨」という言葉がさまざまレベルの情念を表すのに用いられているので、一概には論じられないが、少なくとも次のような視点を念頭に置く必要があると考える。つまり婚姻形態による生活環境の相違である。娶嫁婚社会の女性にとつて、夫の家は自分の帰属すべき場所である。中国古代の法律では「七出」と言つて、女性に七つの過ちがあつた場合、男性から離婚することができるという規定がある。従つて、女性にとつて、夫の家を追い出されることは、帰属すべき居場所の喪失を意味するとともに、なんらかの過ちがあつたという刻印が押されることになる。このことを念頭に置いて『詩経』の「棄

婦怨」の詩を読めば、何故これらの詩の中に必ずと言っていいほど、夫の家で嫁として勤勉に働いたことや、夫の浮気などのことが詠込まれているのが容易に理解できる<sup>10</sup>。この類の歌で表された女性の心情はまさに「(物ごと)の解決不可能性・回復不可能性への自覚に基づく無念さ、悔恨」<sup>11</sup>といえよう。このような「棄婦」による痛恨の記述は、『詩経』以降も脈脈と流れ、一つの系譜をなしている。一方、古代日本の妻問婚は男性が女性のもとへ通う形態で、夫婦別財を原則とする。基本的に女性達の生活の拠点は生家であり、夫が離れることによつて生活の拠点が奪われることはない。この差は看過されやすいが、実際女性達の怨情の質と大きく関わってくるものである。また古代日本の女性の「怨恨歌」の、婚姻生活に機能していることも念頭に置くべきである。夫の訪れを待つ古代日本の女性にとつて、夫は本来「客人」である。夫が通つてくることは女性の魅力を示すことであり、逆に夫が離れることを「恥」とする記述が平安文学の随所に見られる。「三十日三十夜はわがもとに」<sup>12</sup>夫が毎日わがもとへ通つてくることを願う<sup>13</sup>のは当時の女性の共通の心理ではないかと思う。男性の来訪を促す方法の一つには、歌を送ることである。つまり歌は当時の夫婦生活に実際機能する「生活の具」なのである。自分の愛情を相手に伝えたりする歌もあれば、「待つ」ことの辛さを訴えたり、男性の薄情を怨んだりする歌を送ることも当然あつたであろう。言い換えれば「怨」は一つのストラテジーになる場合もある。こういった場合の「怨」は、「物事の実現可能性を自覚されながらそれが実現されないことに基づく不満・憤懣」<sup>13</sup>の吐露であり、それによつて「恋人に柔らかく纏わりついてひきとめようとする」<sup>14</sup>のである。これは恋の終盤が近くにつれて、歌の「怨」の色合いが次第に薄れて、「わが身」の拙さを内省する歌や、諦念の歌が多くなる<sup>15</sup>ところから見ても、「怨」の歌の機能が了解されよう。従つて、夫の家を追い出された中国の「棄婦怨」と『万葉集』

にある「怨恨歌」との間には大きな相違が存在しているのである。これもこういった「棄婦怨」の歌が日本ではあまり受容されなかった一因ではないかと推測される。

ところで、詩経に見える「棄婦」による女性の肉声も、民間歌謡の採取制度が形骸化するにつれて、次第に文人達の作る「閨怨詩」となって代わられるようになる。六朝時代の閨怨詩といえ、主に男性達が作ったもので、いわば男性達が描いた女性像である。男性に棄てられ、悲しみを嘆く女性の歌も「長門怨」や「婕妤怨」のように優美に詠まれるようになったことは見逃せないが、とりわけ遠くにいる夫を思い、孤独に耐えて悲しんでいる女性がこの類の典型である。このような「閨怨詩」と和歌の恋愛表現の交流が見られる作品に、九世紀末に成立した『新撰万葉集』がある。和歌一首ずつに漢詩が付けられているため、和歌と漢詩の表現の相違を見るには格好の材料である。

199 くれないのいろにはいでし かくれぬの したにかよひて こひは

しぬとも

これはどちらかといえば、男性の歌で、女性に自分の思いを打ちあける歌である。しかし、それに付けられている漢詩となると、

閨房怨緒惣無端 万事吞心不表肝 胸火燃来誰敢滅 紅深袖涙不応干

と、主人公が「閨房」の女性に限定され、閨怨詩的に仕上げられている。概していえば、『新撰万葉集』ではこのような恋歌は閨怨詩的に処理されることが多い<sup>1)</sup>。例えばもう一首、

69 ゆうされば ほたるよりけに もゆれども ひかりみねばや ひとの

つれなき

これは『古今和歌集』にも収録された紀友則の歌であり、「夕方になると私の思いが闇を飛ぶ螢の火よりも一層燃えるが、私の気持ちが変わらないせいか、あの人が平然としている」という意味である。これもどちらかといえば、男性の、女性への思慕、ないし女性のつれない態度を怨む歌と考えられる。男性が求愛求婚の段階の歌として女性の冷たい態度を怨むのも一つの類型になっており、これもこの類の歌と考えられるが、付けられた詩を見ると、

怨深喜浅此閨情 夏夜胸燃不異螢 書信休来年月暮 千般其奈望門庭

となる。これも同じく閨怨詩になっている。胸が焼けるほど恋人に恋焦がれたが、しかし彼からの手紙が途絶え、月日が経ってしまった、その来訪を今か今かと待っているというふうには、「待つ女」の怨む歌になっており、先述した坂上郎女の怨恨歌の漢詩版である。平安期の男性文人達は、帰らぬ夫を待つ中国の女性と通ってこない夫を待つ日本の女性との感情の共通点を見出したようである。もともと、古代日本の女性が詠む「待つ」ことの苦しさは中国の士大夫が描いている閨中の佳人の寂しさと質的な相違があるが、男性を思慕しつつ（あるいは来ることを期待しつつ）怨んでいる点では共通しているといえよう。

ところで、何故このように、和歌ではどちらかといえば男性の思慕の歌、或いは怨恨の歌が、漢詩になると女性の怨む閨怨歌になってしまったのか。六朝文学の閨怨詩の強い影響だと言ってしまうまでもであるが、やはり和歌と漢詩の愛情表現の落差に由来するものだと考えたい。先述したように、中国の婚姻制度では男性の女性に直接に求婚する「場」が欠如しており、ま

た士大夫の有為思想により、男女の私情を表現することは蔑まれる傾向にあった。このような「場」の欠如と私情表現への軽蔑は、とりもなおさず男性の愛情表現の創出を制限することであった。男性の愛情表現が大量にしかも日常的に産出されていた古代日本と比べると明らかに貧弱である。従って、和歌の男性の思慕型の歌を漢詩に置き換えようとしても、参照できる表現の「型」が少ない。これは和歌の男性怨恨歌が漢詩の閨怨詩に変えられる一因ではないかと考える。

#### 四 追慕する男性達―「長恨歌」との接点を中心に―

ところで、先ほど見てきた処女塚伝説は十世紀半ば頃に成立した作品『大和物語』の一四七段「生田川」にも見られる。

：かくてその男ども、としよはひ、顔かたち、人のほど、ただ同じばかりなむありける。「心ざしのまさらむにこそはあはれ」と思ふに、心ざしのほど、ただ同じやうなり。暮るればもろともに来あひ、物おこすればただ同じやうにおこす。いづれまされりといふべくもあらず。女思ひわづらひぬ。この人の心ざしのおろかならば、いづれにもあふまじけれど、これもかれも、月日を経て家の門に立ちて、よろづに心ざしを見えければ、しわびぬ。：女「人の心ざしのおなじやうなるになむ、思ひわづらひぬる。さらばいかがすべき」：

この時期になると、『万葉集』の処女塚の話に見られるような男性間の荒々しい「妻争い」の要素が次第に薄れ、女性に対する男性達の「心ざし」つまり誠意が問題視されるようになる。この菟原娘子の話は九世紀後半の宇多天皇の後宮では屏風絵として享受されていた。後宮の女性達はこの伝説に登場

してきた男女に成り代わり、贈答歌の形で歌を詠んでいる。

伊勢の御息所、男の心にて

かげとのみ水のしたにてあひ見れど魂なきからはかひなかりけり

女になりたまひて、女一のみこ

かぎりなくふかくしづめるわが魂は浮きたる人に見えむものは

また、宮、

いづこにか魂をもとめむわたつみのここかしこともおもほえなくに

兵衛の命婦、

つかのまももるともにとぞ契りけるあふとは人に見えぬものから

糸所の別当

かちまけもなくてや果てむ君により思ひくらぶの山はこゆとも

生きたりしをりの女になりて

あふことのかたみに恋ふるなよ竹のたちわづらふと聞くぞ悲しき

また

身を投げてあはむと人に契らねどうき身は水にかけをならべつ

またいま一人の男になりて、

おなじえにすむはうれしきかなれどわれとのみ契らざりけむ

返し、女

うかりけるわがみなそこをおほかたはかかる契りのなからましかば

また、一人の男になりて、

われとのみ契らずながらおなじえにすむはうれしきみぎはとぞ思ふ

その中で、宇多天皇の中宮藤原温子（八七二―九〇七）の歌（傍線部分）は、当時人口に膾炙していた『長恨歌』にある「両処茫茫として皆見えず、

忽ちに聞く海上に仙山有りと、山は虚無縹渺の間に在り」を踏まえている<sup>18</sup>。この時期には白楽天の詩文が大変流行っており、玄宗と楊貴妃の話も処女塚と同様に屏風絵となり、代詠の対象となっていた。この章段にも登場する伊勢の御息所こと温子の女房で、女流歌人の伊勢の歌集『伊勢集』には長恨歌に関する歌群が見られる。

長恨歌の屏風を、亭子院のみかどかゝせ給ひて、その所々詠ませ  
給ひける、みかどの御になして

52 もみぢばに色みえわかず散るものは物おもふ秋の涙なりけり

53 かくばかり落つる涙のつゝまれば雲のたよりに見せましもものを

54 帰り来て君おもほゆる蓮葉に涙の珠とおきゐてぞ見る

これらの代詠歌から、亡き楊貴妃を追慕し、「涙」に暮れている玄宗像がはつきりと浮かんでくる。このような亡き愛妃に涙する君王は、ほかにも古くから李夫人を思う漢武帝がおり、女色耽溺の「嬖惑」の話として伝えられていた。ただ、白居易の「長恨歌」は君王の女色耽溺という政治的、教訓的な側面を持ちながら、人間の「情」のいかんともしがたい悲哀を詠んだ詩である<sup>19</sup>。一方、平安時代におけるこの作品の受容を見ると、『新撰万葉集』下巻には、次のような和歌と漢詩がある。

341 あきもののに たまとかかれる しらつゆは なくあきむしの なみだ  
なりけり

毎秋玄宗契七日 一年一般亘黄河 別日織女恋仙人 蓬萊樓閣好裁縫

和歌では「涙」が詠まれており、漢詩では玄宗と楊貴妃の話と七夕の話が

詠まれている。明らかに男女の死別、離別に関心が置かれている。さらに、『和歌朗詠集』にはかの源順の有名な対句がある。

楊貴妃帰唐帝思 李夫人去漢皇情

亡き愛姫を追慕する唐帝と漢皇が一对の人物として詠まれている。また私家集にもいくつか「長恨歌」の題材を詠むものがあるが、ほとんど『伊勢集』と同様に、亡き楊貴妃に涙する玄宗を詠んだものである。愛する女性の死を悲しむ玄宗、愛する女性の行方を追ひ求めようとする玄宗、これは平安人が感動した異国の多情な君王であった。話を再び菟原娘子に戻すと、中国六朝文学と一度融合したこの伝説は、九世紀後半の後宮サロンで新たに流入した唐帝王と美妃の悲恋の話と再び合流した。そこでは菟原娘子の後を追う二人の男性の「心ざし」がクローズアップされ、それに玄宗皇帝の楊貴妃への追慕の念が重られることによって、ひたすら愛する女性を追い求めようとする男性像が作り上げられたのである。このような詠み方は、万葉時代、律令国家の官人であり文人である虫麻呂が菟原娘子を純粹無垢、慎み深い女性像に脚色したことや、『新撰万葉集』の作者が日本の恋歌を聞怨歌に仕上げたことと見事なコントラストをなしている。やはり後宮の女性達が注目したのは、亡き女性を切々と思ひ悲しむ男性の心情のようである。『源氏物語』に至ると、桐壺更衣を追慕する桐壺帝、紫上を追慕する源氏、さらに大君を追慕する薫などといった、典型的な「追慕する男性像」の完成を見ることができ

一方、二人の男性に求められた処女の行方を追っていくと、『源氏物語』の浮舟物語がある。浮舟物語は、女性が二人の男性の間で選択できない、という処女塚のモチーフを持ちながら、女性の貞操や男性の誠意などといっ



た男女関係のレベルを超えた、情愛により引き起こされた人間の悩みそのものが問題とされ、そこから離脱しようとする女性が描かれるようになる。古い伝承の話し型もこの物語では仏教的な思索によって男女の愛に対する否定的な考えが導き出されるようになったのである。

### 結論：

古代日本の婚姻習俗に根ざした恋の文学の特質を、異なった婚姻習俗を基盤とする古代中国文学との交渉を通してみてきた。日本の古伝承である処女塚伝説歌、日本の詩歌集である『新撰万葉集』における古代日本と古代中国の文学表現の交流を通じて、以下のように要約できる。

古代日本の恋愛文学が持つ豊かな男女間の愛情交流や、愛情表現は妻問婚のないしその後の婿取婚といった婚姻形態に根ざしたものである。処女塚伝説の成立を考えても、そこには男性が自由かつ直接的に女性に求愛、求婚できる「場」が前提にあり、また古代日本女歌の怨恨歌を考えても、男女別別に住む「距離」およびその流動的婚姻生活による「不安」が存在していた。古代日本の恋愛文学の特徴として、まず高度に発達した対詠性が挙げられよう。婚姻慣習に密着した男女間の贈答は古代日本文学の基層をなすものと言っても過言ではない。

一方、中国の恋愛表現の貧弱はこれまで指摘されてきたが、厳しい規制の中から生まれた、非常に屈折した愛情の空想―生死を越えた、人間界と異界を超えたような愛情の空想とその表現もまた「恋」表現の特徴として認められよう。古代日本人は海の彼方から伝わってきた六朝文学や白楽天の「長恨歌」に接したときに、これらの作品が生まれた環境的要素、政治的要素よりも、生死を越えた男女の愛のストーリーに魅了されたのではないか。律令国家の官吏で文人である男性達や後宮サロンの女性達は、それぞれの価値観或い

は好みによって、これらの話を解体した上で、女性を思う男性、男性を思う女性、或いは男性を怨む女性といったように一場面一場面に再構成し、さらに男女の贈答という日本恋愛表現の王道の方法で享受していたのである。

### 注

<sup>1</sup> 例えば、津田左右吉氏が、古代日本に恋歌が多かったことの一因を通い婚という風俗に見出ししており、その内容は家を異にする夫婦の間のものであるとしている（『わが国民思想の研究』1―168 岩波書店一九七七年）。また青木生子氏も『日本古代文学における恋愛』の中で、恋愛と婚姻の関係を指摘している。さらに比較文学の視点から上代文学と中国文学の関係を考察した孫久富氏や『日本上代の恋愛と中国古典』新典社（一九九六）も古代日本と古代中国の婚姻形態の相違に注目し、両国の恋愛表現の相違を指摘している。

<sup>2</sup> 平安時代の文学作品や記録類から見られる夫婦同居は、妻の家に通ってそのまま同居する「通い―妻方居住」と、ある期間妻の家に通い、住んだ後新居に移り住む「通い、妻方―新処居住」との二種類である。なお新居の提供は夫側か妻側かによって、「夫側提供」と「妻側提供」がある。

<sup>3</sup> これについては、拙著『平安貴族の婚姻慣習と源氏物語』（風間書房 二〇〇二年）を参照されたい。

<sup>4</sup> 関口裕子『処女墓伝説歌考：複数の夫をもった美女の悲劇』（吉川弘文館 一九九六）一七八頁―一八二頁

<sup>5</sup> 小島憲之『上代日本文学と中国文学』中 塙書房 一九六四年 一一一―一六頁

<sup>6</sup> 紙幅の制限のため、原文を省略し、『新訳漢文大系 60 内田泉之助訳注の『玉台新詠』の日本語訳のみを掲げる。

<sup>7</sup> 特に菟原娘の話は後述するように、『大和物語』の「生田川」になると、男性達の争いは弓技の競争になり、『竹取物語』のかぐや姫求婚譚に通ずるような展開にな

る。

<sup>8</sup> なんらかの外的要因により死んだ夫婦は、死後一対の鳥になったり樹木になったりする話は、中国文学において、一つの系譜をなしている。例えば、東晋に成立した『捜神記』の「韓憑夫婦」にも似たような話が見られる。

<sup>9</sup> 孫久富注『前掲書第五節』『詩経』の「棄婦怨」と『万葉集』の「怨恨歌」

<sup>10</sup> 例えば、「棄婦怨」の典型ともいえる『詩経・衛風・氓』には「三歳為婦、靡室劳矣、夙興夜寐、靡有朝矣（三とせの間よめとなり、家の苦勞も気にせず、朝早くから夜ふけまで、朝寝などしたこともない）……」といった叙述があり、先述した「焦仲卿妻」の中にも似た内容が見られる。

<sup>11</sup> 松浦友久『詩語の諸相—唐詩ノート』（研文出版一九八一年）一一三頁。但し、松浦氏のこの表現は、詩語としての「恨」の意味を説明する文脈で用いられているもので、『詩経』の棄婦の情念に触れるものではない。ここで夫の家を追い出された棄婦の無念と悔恨の情念に通ずると考え、借用した。

<sup>12</sup> 『蜻蛉日記』安和二年一月新年頃の記述。

<sup>13</sup> 松浦氏注『前掲論文二—三頁。「怨」の字義に関する記述である。これも平安女性性の「怨む」歌の情念を表現するのに最も適切だと考え、借用した。

<sup>14</sup> 鈴木宏子氏が『古今和歌集表現論』（笠間書院 二〇〇〇年）の中で平安の和歌における「うらむ」について、「離れていこうとする恋人に柔らかく纏わりついてひきとめようとする力をもった、洗練された雅語」と指摘している。

<sup>15</sup> 鈴木氏注 13 前掲書

<sup>16</sup> この事は、山口博氏『閨怨の詩人小野小町』三省堂選書一九七九年・一四五頁、一四六頁）にも指摘されている。

<sup>17</sup> 『後撰集』には、同じ紀友則の「うらむ」歌が載っている。

返事も侍らざりければ、又かさねてつかはしける

799 みるもななくめもなき海の磯に出でてかへるがへるも怨つる哉

とあるように、男性が自分の求愛に応じてくれない女に「怨み」の歌を送るのである。このような男性の怨情の歌は漢詩の中にはあまり見られない。

<sup>18</sup> 日本古典文学全集『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』三六八頁の頭注  
<sup>19</sup> これについては、拙稿『長恨歌』と「桐壺」巻（国際日本文学研究報告書3『海外における源氏物語の世界—翻訳と研究—』伊井春樹編 風間書房 二〇〇四年六月）、『源氏物語』の始発「桐壺巻論集」（日向一雅・仁平道明編『源氏物語の始発—桐壺巻論集』二〇〇六年十一月）を参照されたい。

## 参考文献

- 青木生子『日本古代文芸における恋愛』（弘文堂 一九六一年）  
小島憲之『上代日本文学与中国文学』中（塙書房 一九六四年）  
松浦友久氏が『詩語の諸相—唐詩ノート』（研文出版一九八二）  
関口裕子『処女墓伝説歌考：複数の夫をもった美女の悲劇』（吉川弘文館 一九九六）  
孫久富『日本上代の恋愛と中国古典』新典社 一九九六  
鈴木宏子『古今和歌集表現論』（笠間書院 二〇〇〇年）